

780.17
T217
40



スポーツの傷害と 障害をなくす



指導者の心得



Kazumi Tagami
田神一美
〔編著〕

寄贈図書

09005915

筑波大学出版会

まえがき

体育指導に当たる人材を養成する体育学部（専門学群）の教育課程には必ず衛生学や公衆衛生学が含まれ、この授業では保健体育教師になったときに必要な国の衛生に関する制度とそれのもとになる原理が講義されてきた。医学部の衛生学では、国民の生命と健康を守る原理から制度まで理路整然と配列され、医療や基礎医学との連携までがシステムの中にキチンと納まっている。体育学部に「衛生学」や「公衆衛生学」が導入されて150年もの歳月を経て、体育学部生が学ばなければならない衛生学がその姿を変えていく必要性はないのだろうか？ 体育学部や教育学部などで衛生学を講義し、この分野で研究指導に当たる当事者として、現状の把握とそれに沿った授業内容の見直しが求められている。本書は、こうした状況に確かな解を見出そうとする地道な活動を通して得られた体育・スポーツシステムへの新たな衛生学の位置付け方を模索する提案の書である。

医学システムでは、厚生労働省を中心として病院、保健所などの組織とさまざまな医療従事者が衛生の担い手として活動している。体育・スポーツシステムの衛生の担い手は誰になるのであろうか？ それは、体育・スポーツ指導者自身でなければならない。体育・スポーツ指導者の目の前で、スポーツに取り組む人々の健康と生命を守ってやれるのは、私たち自身しかい

ない。しかし、私たちにも予期できない事象によって彼らの健康や生命が損なわれる事例は枚挙にいとまがない。

体育学部の衛生学では、体育・スポーツ指導者を担い手とする「衛生」の実をあげ、スポーツ・運動中の被害者や犠牲者の最少化に向けた取り組みにつなげていかなければならない。現状の問題点は何か、またそれらはいかにすれば見えてくるのか、見つけた課題にはどのように対処すべきか、そして体育・スポーツ指導者の衛生学によって私たちにもたらされるものは何かといった問いの一つひとつ答えを見つけていく。しかし、まだまだ稚拙な答えしか用意できていない分野があり、まったく手つかずの分野さえ多いという実情がある。読者の叱声と若い方々の参加を得て、体育・スポーツ指導者のための衛生学を育て、「体育・スポーツによる健康破壊ゼロ」をたぐり寄せる一助となれることを望んでいる。

2009年 早春の研究室にて

編者記す